

IKITOMO

自然の恵みを感じる生物多様性マガジン「イキトモ」

私たちの未来と生物多様性



2010-2020
DECADE ON BIODIVERSITY

VOL.
20
SPRING
2021

私たちの未来と生物多様性



生物多様性とは、生きものたちの豊かな個性とつながりのことです。地球上の生きものは長い歴史の中で、様々な環境に適応して進化してきました。現在、地球上には3,000万種類もの多様な生きものがいると言われています。

これらの生命はひとつひとつに個性があり、すべての生きものはお互いにつながりあい、支え合って生きています。私たちの暮らしに欠かせない水や食料、エネルギーなどは生物多様性がもたらす自然の恵みです。生物多様性豊かな自然は私たちの命と暮らしを支えています。

2010年に生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)で採択された、生物多様性保全のための新たな世界目標である「愛知目標」の達成を目指し、国、地方公共団体、事業者、国民および民間の団体など、国内のあらゆる部門の参画と連携を促進し、生物多様性の保全と持続可能な利用に関する取り組みを推進するため、「国連生物多様性の10年日本委員会」(UNDB-J)が2011年に設立されました。

UNDB-Jではこの10年、生物多様性の主流化に向けた意見・情報交換の場として、国内イベントや国際会議での活動報告、広報の実施、優れた保全活動に対する表彰や認定等を行ってきました。また、様々な企業・団体において、生物多様性への配慮が行われるようになっていきます。

生物多様性の保全は、社会的な課題を解決し、私たちの未来を考える上で欠かせないものなのです。

無印良品 株式会社良品計画 (卸売業・小売業)

オーガニックコットンを 衣料品と生活雑貨で利用。

衣料品は2018年からほぼすべて、生活雑貨のファブリックは2019年秋冬から、オーガニックコットンを100%使用。オーガニックコットンの中でも手触りがよく丈夫な超長綿を種まきから収穫までケアして生産量を増やし、継続的・長期的に生産することで価格を抑える取り組みを行っています。また資源を無駄にしないという考えから、シャツやTシャツの生産過程で出た端切れを人の手で仕上げ、再生コットンとして製品化しています。

オーガニックコットンを使用した太番手天竺編みポロネックTシャツ。



「絶滅の恐れがある生きもの」をモチーフにした子供用プリントTシャツは売上金の一部を国際自然保護連合日本委員会に寄付。子供たちがTシャツを着ることが、モチーフとなる動物の保護活動につながり、生きものたちの置かれている状況に興味を抱ききっかけとなりました。また同社が運営を行う3つのキャンプ場では周辺の森林を管理。アウトドア教室やサマーキャンプの開催を通して、自然への理解を深める活動も行っています。

生物多様性



主流化の取り組み

生物多様性の保全のための取り組みが、企業をはじめ、NGOや市民団体など、様々な分野で進んでいます。持続可能な社会を目指す先進的な例を紹介します。

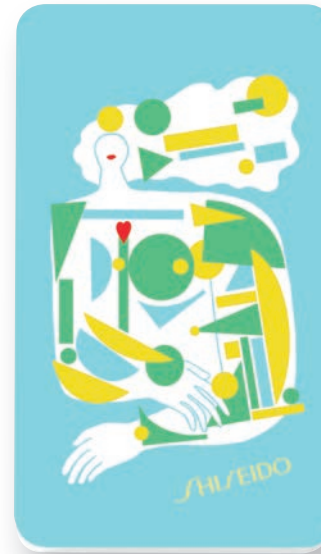


農薬や化学肥料を3年以上、使用していない土地で育てられるコットンは生物多様性に直接貢献。絶滅危惧種がモチーフのTシャツを着ること自体が保護活動につながり、興味を持つきっかけになっています。

自然の起伏を生かし、環境破壊に結びつく施設を作らずにできた「カンバーニャ孺恋キャンプ場」(群馬)。

世界初「カネカ生分解性ポリマー Green Planet™」を容器に採用した「アクアジェルリップパレット」。

※「カネカ生分解性ポリマー PHBH®」は「カネカ生分解性ポリマー Green Planet™」に製品名が変更されました。



SHISEIDO 株式会社 資生堂
(化粧品製造・販売)



自然界の海水や土壌に存在する微生物により、最終的に炭酸ガスと水になる素材を利用することで環境汚染低減に貢献しています。土中だけでなく、これまで難しかった海中での生分解も実現できました。

海水中でも生分解される素材を 化粧品の容器に活用。

サーキュラー・エコノミーの考えに賛同し、パッケージに関してはリスペクト、リデュース、リユース、リサイクル、リプレースという「資生堂5Rs」を定め、様々な取り組みを通して、サステナブルな世界の実現を目指しています。そのひとつとして資生堂では、海水中でも生分解されることで地球環境保全に貢献する、100%植物由来の「カネカ生分解性ポリマー Green Planet™」の化粧品容器や什器などへの活用を目指し、開発を開始しました。

2020年には世界で初めて、ブランドSHISEIDOのリップパレットの容器に用いて数量限定で販売。また美容液詰め替えサービスもグローバルプロ

ジェクトとしてスタートしました。ほかにも「樹木との共生」をテーマにしたスキンケアブランドを発売。植物由来の素材から化粧品を製造し、商品パッケージではアップサイクル木材を使用しています。さらには森林保全活動へ参加するなど、環境負荷を軽減する取り組みを進めています。



徹底した衛生管理のもと、美容液の詰め替えのサービスをグローバルプロジェクトとして開始。



株式会社セブン&アイ・ホールディングス
(卸売業・小売業)



サプライチェーン全体で資源の効率的な利用により貢献。イトーヨーカドーの取り組みである生物多様性保全を考えた田んぼづくりでは、商品の収益の一部を産地の環境整備のために寄付しています。



持続可能な資源の調達で顧客と取引先を巻き込んだエシカルな社会づくり。

セブン&アイグループでは環境宣言「GREEN CHALLENGE 2050」を掲げ、持続可能な原材料調達の取り組み目標として、2030年までにセブンプレミアムを含むオリジナル商品で食品原材料の50%、2050年までに100%を持続可能性が担保されたものにすることを定めています。農産物では安全な農場運営や適正管理のための認証取得、オーガニック、フェアトレードなどの認証された原材料調達を推進。イトーヨーカドーでは、農薬や化学肥料を減

らすだけでなく、野生生物が息できる田んぼをつくり、生物多様性農業を実践し、「環境保全・自然共生型栽培米」シリーズを販売しています。また水産物では、豊かな海の恵みを未来世代に引き継ぐために、MSC[®]をはじめとした持続可能性が担保された商品の販売に取り組んでいます。グループ全体で環境負荷の低減に貢献できるほか、省エネや廃棄物削減によるコスト削減などにより、経営上のメリットも現われています。

右／MSC認証のたらこや明太子商品をグループ内店舗で販売。環境に配慮した漁業を実践するアラスカシーフードを積極的に採用。

※ MSC 認証 持続可能で環境に配慮した漁業の認証制度



にじゅうまるプロジェクト
for Life on Earth 2011-2020

愛知目標達成のため現場の活動を発信する民間発の試み。

にじゅうまるプロジェクト (NGO)



国際会議に参加し、様々なセミナー、ワークショップも開催。

生物多様性保全の世界目標である「愛知目標」達成を目指し、国際自然保護連合 (IUCN-J) および日本の生物多様性保全をリードする団体が集結し、2011年にキックオフしたプロジェクト。現場で汗を流す活動を「にじゅうまる宣言」として届けてもらい、国内外に伝えるために取り組みを紹介しています。2020年末までに、752団体から、1,080もの宣言が寄せられまし

た。また生物多様性条約会議に参加し、国際的な動きを伝えるセミナー、宣言団体が集い活動の底上げを図る全国大会など、10年間の中でさまざまな活動を実施しました。今後は「広める10年から、効果的な10年へ」をキーワードに、これからも生まれてくるであろうアクションを、社会の仕組みにまで押し上げるなど、効果を高める支援に力を入れていきます。



積極的な宣言と情報発信により、多くの人に伝えることができました。団体間の連携が進み、活動の幅や継続性の向上につながっています。国の優良事例集に取り上げられ、高評価を受けています。

ワークショップの開催で地域を超えて情報を共有しました。



生物多様性
わかもの
ネットワーク

学生と若手社会人が自然との共生を目指して日本各地で活動。

生物多様性わかものネットワーク (市民団体)

「自然と共生した社会の実現」をビジョンに掲げ、普及啓発、ネットワーク、政策提言を軸に様々な取り組みを行っている団体です。生物多様性やその問題に対して、研究等を行う学生と若手社会人が所属し、日本各地で活動を展開しています。特に普及啓発では、小学生から大学生までを対象に、生活に身近な視点を多く盛り込んだ参加型

イベントや講演などを行っています。生物多様性に興味や関心を深め、行動に移すきっかけの場にできるイベントを開催し、参加者の興味に合わせた企画づくりを行うスキルを学ぶことも同時にできました。今後は、つながりのある人や団体とさらなるネットワークを構築し、活動を活発化させる交流ができる企画を行う予定です。



次世代を担うユース世代へ、生物多様性の問題に強い関心を持ってもらうことができました。実際に行動を起こすきっかけをつくり、より多くの人たちを生物多様性の取り組みに巻き込むことができています。



TAKESHI NAGANUMA

長沼毅

(生物学者/理学博士/
広島大学教授)



CHITOSE HAJIME

元ちとせ

(歌手)



MIHO TAKAGI

高木美保

(タレント)

今こそ私たちが考えなければ
ならないことがあります。

20数年前、環境教育の専門家から、
このまま自然を開発し続ければ、いず
れ人間の生活圏に感染症が侵入するだ
ろうと教わった。それが現実となった
今、私たちは学び直さなければなら
ない。

例えば利用できる生物資源には限界
があるのに、その消費量は年々増大し
ている。人気のエキゾチックペットは
実は密輸も後を絶たず、必要な衛生手
続きがされていないと感染症の原因に
なるという。原因を作るのも人間だが、
なくす事ができるのも人間だ。

TOMOKO NAKAJIMA

中嶋朋子

(女優)



SHIN-ICHI FUKUOKA

福岡伸一

(生物学者)



MARIKO SHINJU

真珠まりこ

(絵本作家)



KEN-ICHIRO MOGI

茂木健一郎

(脳科学者)



著名人による広報組織「地球いき
もの応援団」とそこから任命され
たリーダーたちが、様々なメッセ
ージを発信してきました。

MASAO KOSUGE

小菅正夫

(北海道大学客員教授/
元旭山動物園園長)



生物多様性リーダー 地球いきもの応援団

SHINOBU
MATSUMOTO

松本志のぶ

(フリーアナウンサー)



IRUKA

イルカ

(シンガーソングライター/絵本作家/
国際自然保護連合(IUCN)親善大使)



「生物多様性」という言葉を
幅広く伝えるために！

「COP10 愛知・名古屋」の前に、私は
IUCN 親善大使としてコンサートを開
催し、絵本「まあるいいのち」を描き
ました。今「多様性」という言葉は幅
広く使われるようになりましたね。し
かしその間、大自然からのメッセージ

に地球上の全員が耳を傾けたでしょ
うか。大自然は親心といつも感じます。
気候変動による災害やコロナ禍とい
う厳しさを大自然からの愛と真摯に受け
学び、共存する喜びを未来に伝えたい！
2021年春

MASAMITSU MORITA

森田正光

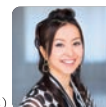
(気象予報士)



MIYOKO OOMOMO

大桃美代子

(新潟食料農業大学
客員教授/一般社団法人
国際 SDGs 推進協会理事)



SAKANA-KUN

さかなクン

(東京海洋大学名誉博士/
客員准教授)



MITSUHIKO IMAMORI

今森光彦

(写真家/切り絵作家)



里山の自然と暮らしから感じる
生きものの命あふれる未来。

雑木林や田んぼで写真を撮っている
のは、里山の生きものたちは、人と
一緒に暮らしている、ということ。ア
マガエルもアキアカネも、農家の人が
田畑を耕していないとなくなってし
まいます。私たちの未来は、生きもの

のたちの未来でもあります。たくさん
の命にあふれている自然がもどってき
たらいいと思います。生きものが
戻ってくると風景もきれいになります。
そんな未来に向けて、みんなで身近な
自然を考えたいものです。

※メッセージは執筆者からお寄せいただいたものであり、UNDB-J・環境省の見解を示すものではありません。

涌井史郎先生にお伺いしました。



今は未来への転換期。 生物多様性のその先へ。

「国連生物多様性の10年日本委員会」の委員長代理として幅広く活動してきた涌井史郎先生に、生物多様性の10年で変わったこと、さらに私たちが向かうべき未来についてお話いただきました。

「国連生物多様性の10年」の間で、私たちの意識は大きく変化しました。生物多様性という言葉自体、やや学理的で理解が難しいのではないかという懸念もありましたが、単に種や遺伝子が多様であるというだけでなく、広範な生態系サービスの重要な源であり、私たちの日常生活は生物多様性なくしては成り立たないのだという理解が進んできたのではないかと考えています。

意識改革が成功した要因

特に、経済界での取り組みの影響力は大きかった。環境と経済の両立はそう簡単ではありません。しかし経団連と経団連自然保護協議会は、自ら行動指針「経団連生物多様性宣言イニシアチブ」を策定し、度々見直しもされ、国内外に広く発信してこられました。その効果もあり、小売業から卸売業、製造業、サービス産業にいたるまで、企業活動の中で生物多様性の保全を念頭においた取り組みが、原材料の調達、加工、流通などの各プロセスに渡って、数多く行われています。

また市民活動も重要な役割を果たしてい

ます。生物多様性への理解は階層的なものです。生物多様性とは？という質問の答えが分からなくても、生きものは大切という実感があれば、正解なのです。

例えば気候変動は、高温や台風被害といった、私たちへの直接的なマイナスの影響を介して、実感がありますよね。しかし生物多様性では、今のところそれが感じ難い。だから生物多様性が健全だと、こんなに良いことがある、といったプラスの部分の問いかけていくことも大切です。

また気候変動は大気中のCO2等の増加という世界共通の要因によって、世界規模で引き起こされます。本質的にグローバルな問題です。一方で生物多様性はローカルな問題です。一方で生物多様性はローカルで捉えていかなければならない。生物多様性は地域ごとに異なり、劣化の原因もそれぞれで、享受できる生物多様性の恵みにも地域性があります。だから、まずはローカルで考えるべきで、その積み上げがグローバルになっていく。そのようなアプローチで、より実感に近い活動に変換していったこと、さらに5年ほど前から進めてきた若い世代に向けたプラットフォームづく

りも成功につながったのだと思っています。

経済は様々な方策によって成長する可能性がありますが、残念ながら地球は成長しません。今まではフォアキャストで、過去のデータから未来を予測してきました。しかしこれからはバックキャスト=未来のあるべき姿から現在に逆算していく方法で考えなければなりません。持続的な未来を確保し、地球と共存していくためには倫理的なルールが必要です。

グリーン革命が未来を開く

生物多様性においては、日本が世界をリードしています。国連の事務局内でも中心となって活動し、幹事役として各国に声をかけたり、事例発表も積極的に行うなど、国際会議では欠くことのできない存在となっています。「国連生物多様性の10年」が始まる前の国際会議で、CO2の排出権取引のように生物多様性を一種の経済的システムとして考えていくべきではないか、という議論がありました。経済的な仕組みに組み込むと、社会的に広がっているように見えるかもしれませんが、なぜ生物多様

性が大切なのかという本質を置き忘れる可能性がある。まずはプライスレスで考えて、倫理的な秩序を確保した上で、経済価値に反転していこうという私たち日本委員会の考えが伝わり、そこからスタートできたことが結果的によかったのではないかと考えています。この10年で生物多様性の大切さが浸透し、目指していた倫理という基盤ができてきたのではないのでしょうか。

ここ最近の新型コロナウイルス感染症の世界的な拡大は、我々の社会の在り方に対する、自然界からの警鐘ではないかという見方もあります。世界史の中でも、文明の転換点はパンデミックがテコになっています。今回の新型コロナウイルスでは全世界75億人が記憶を共有しました。この重さは歴史的。今は次の文明への転換点です。環境には容量があり、そこには人知を超えたシステムがあります。そのシステムをどう科学し、維持していくかが鍵になっていくでしょう。生物多様性に根ざした「グリーンレボリューション」とでも呼ぶべき社会の改革につながっていくことを期待したいですね。

お話を伺いました



SHIRO WAKUI

涌井史郎

(造園家、
ランドスケープアーキテクト)

国際博覧会「愛・地球博」の会場演出総合プロデューサーをはじめ、「ハウステンボス」「首都高 大橋ジャンクション」など数多くのランドスケープ計画に携わる。東京都市大学特別教授、岐阜県立森林アカデミー学長ほか。

Message For The Future

REPORT

国連生物多様性の10年日本委員会の活動

「生物多様性のためにできること。みんな一緒にはじめよう」をキャッチコピーに、愛知目標の達成を目指して連携事業の認定や推薦図書を選定、イベントの開催、広報・普及啓発ツールの紹介などを行ってきました。



認定連携事業

様々な分野での参加と連携を促進するため、「にじゅうまるプロジェクト」等の中から委員会が推奨する連携事業を認定し、認定を通じて活動の支援を進めました。



MY 行動宣言

一人ひとりが生物多様性との関わりを日常生活の中で捉えることができるよう、たべよう、ふれよう、つたえよう、まもろう、えらぼうの5つのアクションから自分にできることを選んで宣言します。



推薦図書

生物多様性についての理解や普及啓発、環境学習にも資する図書を推薦図書として選定し、また寄贈プログラムを整備して協賛団体を募集し、図書の活用を行う施設や団体に寄贈しました。



生物多様性 アクション大賞

生物多様性の保全や持続可能な利用につながる地域の活動を発掘し、光を当てるため、MY 行動宣言の5つのアクションに即した活動を全国から募集し、表彰しました。



グリーンウェイブ

「国際生物多様性の日」である5月22日午前10時に合わせて、世界各地で植樹を行う活動です。日本国内では、この10年間で3,374団体、26万人が参加し、約33万本の植樹ができました。



イベント開催

生物多様性の取組の連携を促進するため、意見交換などを行う全国ミーティングや地域セミナー等を実施。未来へつなぐ「国連生物多様性の10年」せいかりレーへの参加も呼びかけています。



広報

生物多様性の認知や理解を広げるために、「生物多様性キャラクター応援団」の任命や、「Iki・Tomo」をはじめとする広報ツールを作成・配布。これらのツールはウェブサイトでも読むことができます。

